

智頭の森と村日記⑧

丹羽 健 司

3月11日午後2時46分、大きな揺れが会場を襲った。それは私が東京朝日新聞社のホールで智頭町木の宿場プロジェクトのことを発表して降壇した瞬間だった。その後はご承知のとおりだ。朝日新聞社ではすぐに対策本部が設置され随時館内放送で新しい情報が流された。全国から森林関係者が集まっていたので、特に東北方面の人たちは家族の安否確認に公衆電話に並んだ。公共交通はマヒしホテルまで歩いた。ホテルは断水で口



ビーは解放され、帰宅難民のサラリーマンであふれた。夜中に何度も揺れ、朝には原発事故が報じられた。翌朝、新幹線が動くと同時に騒然とした東京駅から鳥取まで脱出してきた。

●軽トラとチェーンソーで

「俺たちのやることをやろう。木の宿場で志く材を集めてそれを原資にすればいいじゃないか」

露木さんが言った。3月29日夜の百人委員会農林部会でのこと。賀露おやじの会の藤田代表が

「避難所の段ボールの間仕切りが見るに忍びない。間仕切りや棚に智頭杉の組手^{くでじゅう}をプレゼントしたい。少しでも避難所生活の苦痛を和らげたいので協力してほしい」と呼び掛けた。間伐材や素材^{（胴縁材）}、組手切り加工を智頭の関連業者に格安で提供していただけるようにということ、その募金活動協力をお願いだった。山村にしか、伝統林業地にしか出来ない支援をしたいという提案だった。木の宿

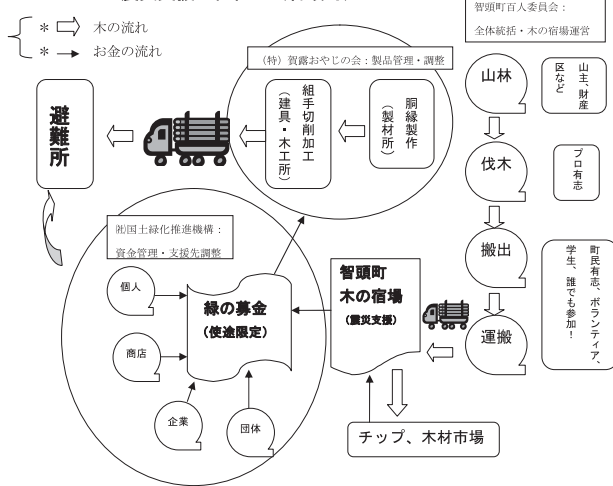
場を支援した組手^{くでじゅう}で今度は被災地支援をと訴えた。

露木さんに続いて国石さんは「どれだけできるか集められるか分からんけど、智頭はそういう支援をするという旗を掲げようや。組手切りだって規格と素材さえあればうちのおやじは大工だったから何本か作れる」と言つてのけた。「そうだ、軽トラとチェーンソーの晩酌をちよつと我慢して震災支援に回すだけだ」と皆で笑った。鼻の奥がツンとした。やっぱり智頭はすごいと心底思った。

●震災支援を

話は具体的になった。農林部会だけでなく智頭町百人委員会全体の取り組みになるよう働きかけようと綾木委員長が決断した。近々に東北震災支援のための志く材搬出を呼びかけよう。林地残材のたくさんあるところを見つくるって、なければプロが伐って登録出荷者^{（登録業者）}だけでなく市民や大学生にも搬出ボランティアを呼びかけよう。生木の製材は狂うので、製材所の在庫の杉板を格安で胴縁^{（胴縁材）}にして提供してもらえように、組手切り加工できるところにも同じように呼び掛けよう。企業や商店、

震災支援の仕組み（智頭町）



*組手^{くでじゅう}（くでじゅう・9de10）とは…

厚さ 15mm 幅 39mm のいわゆる胴縁材に障子の棧のように一定間隔に切り欠き（組手切）したものを組み合わせて衝立や棚などが簡単に組み立てられるキット。この売り上げの 5% を智頭木の宿場に寄付する仕組み。

●ぬくもりの連鎖

一般市民には募金を…。集まった志く材は、チップや木材市場に出して換金し、それに募金を加えて胴縁を買い取り組手切り加工に出す。一定量集まったら有志がトラックで被災地に持参し、現地ボランティアに組み立て指導する。（国土緑化推進機構が、震災支援の使途限定募金モデルとすることと支援先の選定コーディネートをする話も進んでいる。

4月の中旬には、智頭杉による震災支援の旗が掲げられ、震災支援木の宿場が設置されることだろつ。そして、被災地から

はるか遠く離れた智頭で木を伐り、運び、加工する人たちの群れが出現する。木を介して人と人がつながる。

都会の駅前や商店街は募金団体であふれている。しかし、山村には山村ならではの支援がある。「疎開」という言葉も復活した。智頭の先見性が証明された。子どもの疎開受け入れも始まった。私たちは木の香りと人のぬくもりの連鎖で、智頭のエールを海辺の被災地に伝えたいと思う。

『森は海を海は森を恋いながら
悠久よりの愛紡ぎゆく』

（歌集 森は海の恋人
熊谷龍子より）

智頭の森と村日記⑨

丹羽 健 司



●底 力

智頭の杉で作った間仕切り棚をプレゼントして避難所の暮らしを少しでも和らげていただけたらと、百人委員会から始まった東日本大震災支援プロジェクトは「杉の町智頭」のまさに町ぐるみの取り組みとなった。

「こりやなかかいんでないの」組手仕の間仕切り棚づくりに、一人二人と被災者の方々が一緒に組み立てを始めた。「のこぎりで切って自在に作れるんだ、これ」手でグイッと押しこんだり足で踏みつけたり、おじさんおばさんたちの東北弁がだんだん熱を帯び笑い声が出始めた。5月4日朝、宮城県気仙沼市唐桑小学校、30世帯が暮らす避難所に私たちは居た。海岸から数百メートル、小学校のすぐ隣に船が横たわり住居や店舗があったと思われる跡ががれきと化している。そこに転がる掛け時計の針が3時22分を指したまま止まっていた。

4月12日、農林部会のアドバースに従い協力依頼に青木製材に飛び込んだ。智頭町木材協会の会長でもある青木社長に面会を求め概要と趣旨をお話した。大至急、格安で胴縁になる板材を提供していただきたいと全く無茶なお願いだ。これから智頭町内の全製材所を同じように戸別に訪問すると言ったら、「ちよつと待て」と制してすぐ電話をかけられた。「明日午後製材のメンバーに集まったらうから、来れるか?」「はい」翌日本材協会会議室に会員さんが集合した。素人のシド口モド口の説明を豪太郎さんが専門用語でフォローしてくれた。西川さんが「200万円を超える募金

が必要のようだが、集まらなかったらどうするつもりだい?」「緑の募金が応援してくれるが、足りないときは私たちNPOが負担するつもりです」と答えた、胃がキリリと痛んだ。皆の顔色が変わった。一瞬怒られるかと思った。「ヨソの人らにそんなことさせるわけにはいかん」「小金をもらっても腹が立つだけだ、酒の一本でいい」顔が熱くなった。「1社1000本を目標に来週には森林の加工場に持ち込もう」そのあとは加工場で何とかするけん・・・何なんだこの人たちは。このごろ口癖になってしまった、やっぱり「智頭はすごい」夢を見ているようだった。



●志く材

4月23、24日、新田の山郷財産区有林に66人が集まった。綾木委員長はじめ百人委員会、木の宿場実行委員会、鳥取大学生、環境大学生、NPO因幡の山と里、森の学校の卒業生、智頭農林の長谷先生たち、島根県の大場さんほか、19歳の学生から80歳を超す三輪泰蔵さん、小林弘さんまで素人からプロまでが「志く材」の搬出に泥にまみれ汗を流した。郷原の土場には短材が積み、値の高い用材になりそうなものはそのままユニックに積まれて組合に直行した。「今回2日とも出られないけど、今度必ず志材置き場に出しておくら」という電話ももらった。木の宿場、震災支援、この町ではいま善意が連鎖している。

●滑り込みセーフ

4月29日、鳥取県植樹祭が智頭町民グラウンドで開催され、最初に震災犠牲者に黙とうが捧げられた。続いて、石谷副町長以下6人の震災支援組手什輸送隊が拍手とともに出発した。

しかし、実はトラック上の組手什は1000本足らずで残りの大半は胴縁のままだった。木



材協会と森林組合の全面支援でたった10日間に胴縁は6千本強が集まったものの、最後の組手切り加工が遅れていた。諦めかけた28日、「何かお手伝いできることがあれば」と鳥取市の石黒建具が協力を申し出て下さった。三和工業とあわせて5月1日夕方まで、連休返上のフル操業が始まった。めどがついた。

翌朝の発送に向けて5月1日は町民体育館で9時から焼印押しと荷づくり。同時進行で製品を建具屋さんから軽トラでピストン輸送し、20本ずつ縛り、大きな「智頭杉」と小さな「鳥取県」「ちづ町」の焼印を3本に1本の割合で押す。最後に端を揃えて切り落とす。総勢12人の作業が終わったのは夜7時、智頭の思いがいっぱい詰まった5260本が玄関に積み上げられた。

智頭の森と村日記⑩

丹羽 健 司

●震災支援の旅

「木の香りで和らぐ気持ちになります」と女性、「これで避難所の生活もずいぶん楽になる、最高!」と自治会長、画面の中で避難所の方々が話す。5月4日の唐桑小学校での智頭杉の組手^{しんて}震災支援の様子は、5月6日朝NHKテレビ「おはよう日本」で全国放送、夕方は「いちおし鳥取」で詳しく放映された。

●組み立て

5月5日は、南三陸町の避難所になっている旧鱒淵小学校で組手^{しんて}を贈呈し、早速組み立てを始めた。最初は怪訝そうに遠巻きに眺めていた人達も、石谷副町長や綾木さんに促されて組み立ての輪に入ってくる。女性ばかりでも組み立てが始まった。「女子組誕生!」と囁き立てた。男は手でグイッと押しこめ始めた。「こじやいいわ、ストレス解消だね」と笑い声がはじけた。踏みつけながらどんどん形に



なっていく。「誰かの身代わりで踏みつけられてる!」とジョークが飛び交う。知らぬ間に赤いジャンパーのおじさんが混じっている。環境副大臣の近藤昭一氏だった。プライベートのボランティア参加だとか。でもちやっかり記念写真には入る(笑・写真左)。最初堅かった雰囲気^{きんぎ}が避難者とボランティアが混然となつて盛り上がった。出来上がるなりそそくさと自分の間仕切り棚用に運ぶ人、仮設住宅用に確保する人などいろいろ。

こうして5日間、往復2400kmの6人の震災支援の旅は終わった。その後、智頭町役場

に電話が入った。「杉の香りがとてもよく、感激しております。」「組手^{しんて}をわざわざ鳥取県から運んでいただき、ありがとうございます!」「もし鳥取県に行く事がありましたら、智頭町に伺いますので、その時はよろしくお願いします。」「腰の鈍痛が癒された。」

●杉小判まわり始める

5月11日・12日は木の宿場出荷者と商店の説明会。本年度の出荷期間は5月21日から11月30日まで、杉小判流通は1月中旬までの予定。今回の特徴は、①杉小判の2次流通②ガソリン共用券③震災支援募金&志く材出荷。

①は、前回の杉小判の流通は1度きりだったのが、期限内(前期は8月末、後期は1月中旬)で何度も使い回しがきくようになる。これまでお釣りは出なかったのが、これからはその分がお店の「智頭木の宿場震災支援募金箱」にチャリンと入れられることになる。お店に渡った杉小判はお店が自由に使える。杉小判がほしい人は登録店舗で購入(交換)もできる。11月まで1000トンが出荷され600万円の杉小判が発行される。

もし5回転すると3000万円、10回転で6000万円が智頭町の登録店舗を循環することになる。

②は、杉小判発券5枚につき1枚がガソリン給油にも使えるようになった。

③は、お店のお客さんには募金箱への募金をお願いすることと、出荷者には3カ所の「志く材」置き場にどんどん寄付の志く材を置いてほしいというお願い。どちらも、緑の募金使途限定募金(東日本大震災復興事業)として、智頭杉組手^{しんて}の寄贈に充てられる。

そして5月21日、木の宿場第2期通年社会実験のキックオフ。小林悟さんと中田靴店女将が「山と商店が手を取り合って頑張るぞ!」とエール。山と商店の仲間づくりが始まった。



※1「志く材」: 杉小判の発券を求めない木の宿場事業への寄付材

山形地区の聞き書き本

そうだった、何にもないと思っていた村には何でもあった。ないものはこの手で作った、山からいただいた。ひとりで出来ないことは仲間が助け合ってきた。感謝、喜び、誇り...私たちは、山の恵みと人の絆で生きてきた。忘れていたそんなことを、あの子らが聞き書きとやらで掘り起こしてくれた。



6月19日販売開始!
定価 1,200円

220p: 観光協会、下山書店などで販売

語り手	綾木守	聞き手	上原美佳
	白岩紫貴		江本奈穂
	武田政光		島田彩花
	寺谷敦雄		谷口晋一
	武田昭雄		中村千尋
	寺田静江		木村朋美
	寺谷恒雄		庵道美香
	田中潔		村田優美
	大呂知津子		伊原佳輝
	高橋菊枝		谷朋枝
	大森正子		上瀬まりな
	綾木一美		(鳥取大学・環境大学・学生)
	谷口英治		

※2 杉小判登録店舗: 紫色の「木の宿場」のぼり旗が目印

智頭の森と村日記 番外編

丹羽健司

「いくらばつちくてもせん（先）の家が恋しいよねえ」笑顔の中でぼろっと嘆息がこぼれた。

●南三陸町再訪

この冬一番の寒波の1月28日、私と藤田（賀露おやじ）の姿は宮城県南三陸町の中瀬仮設住宅にいた。一歩海側に出るとすぐ高く

積み上げられたがれきの山と廃墟が続いていた。復興はそこで足踏みしていた。昨年5月に智頭町から寄贈した1万本の組手^{くみで}のその後を確かめる旅だった。昨年5月に気仙沼市や登米市の避難所へ寄贈した様子やその顛末は広報ちづ5〜7月号に概



略を報告した。その趣旨は、①緊急的に避難所の被災者プライバシー保護のために間仕切り収納棚として寄贈する。②組手什製作のノウハウを伝え産業振興の一助となる。③組手什を使っていたことで木づかい運動を促進することであった。

あの時ノウハウ移転した栗駒木材と登米森林組合は地元の木でそれぞれ5千本を避難所に寄贈した。栗駒木材は仮店舗陳列棚支援に取り組み始め、登米森林組合は名取市の図書館の本棚を全て組手什にした。では、智頭杉の組手什はどうなったのだろうか？

●焼印

中瀬集落は集落丸ごと津波にのみ込まれた。その防災センターの建物で最後まで防災無線で避難を呼びかけた遠藤末希さんのエピソードは「天使の声」として教科書に掲載されることになった。その中瀬集落は区長が集落をバラバラにしないためとまって仮設住宅に移転すること

を行政と粘り強く交渉した。そして集団移転を実現した初で稀な事例となった。彼らの避難所は私たちが2日目に組手什を持ち込んだ鱒淵小学校だったのだ。集会所で区長夫人に当時の写真をお見せしたら、すぐにその人たちを集めてくれた。待つ間集会所の中をよく見たらそこかしこに組手什が使われている。書棚、食器棚、テレビ台……そして神棚の台にまでなっている。そこに「智頭杉」の大きな焼印。嗚呼、良かった、ありがたい、思わずつぶやいた。

ばあちゃんたちが次々に集まってくる。来訪の趣旨を伝え、写真やNHK TVで全国放映されたビデオを見せたら。あの時がそれぞれフラッシュバックしているようだ。一息置いて怖々尋ねた「この組手什はおうちで使われていますか？」使っている使っている、仮設住宅はあてがわれても家具はなんもないし、狭いから棚にしてあり



がたく使わしてもらっているよ」「ほっと胸をなでた、「よかつたら、見せていただけますか？」」「じゃあ、ちよっと部屋を片付けて来っから」ばあちゃんたちがそれぞれ散らばった。現地を案内してくれた若者二人と私たちは手分けして家庭訪問。

4畳半と6畳とキッチン、私が訪ねたのは佐藤さん宅、電子レンジや食品の壁面収納棚、居間にはテレビの横でポット台や本棚になったり。ステンレスの棚やプラスチックの下駄箱を指さして、「もう少しあれば、これも作れたのにねえ。けど、みんなも欲しいので分け合ったのよ」「天井まで棚を作るともっと収納できるから、部屋が広く使えるんだけどね。」

どの家も同じだった。仏壇の台になったり、端材の組手什まで花台になったり、余すことなく大事に使われていた。ありがたさと申しわけなさが胸が一杯になった。

●組手什絆プロジェクト

鳥取に帰って話したら学生たちは激しく反応した。仮設住宅や仮設店舗への組手什支援活動、学生組手什絆プロジェクトが始まった。鳥取に来る新入生や鳥取を出ていく高校生や社会人

に組手什を買っていただき、その売り上げの一部を宮城のNPOに送り現地製作した組手什を仮設住宅などに配布し、そこに学生も組み立てボランティアで行く。この1年受験や就活で思いはあっても震災支援に関われなかつた若者たちに智頭杉を通じて絆づくりに参加してもらう活動だ。

伝えたいことは何万字あっても足りない。3月末で智頭を去る前に、昨年の震災支援とその後、森の健康診断の結果報告、そして木の宿場や聞き書きなどこの2年間の活動報告をしてお礼を述べたい。左記のように町がその場を設定して下さった。詳しくはそこで報告したい。生中継で被災地からの映像とメッセージも届く予定です。是非参加を。

3月15日(木)19:00～

会場：ほのぼのホール

「負けるな震災、ありがとう
智頭町、お礼と報告の夕べ」
～丹羽健司～

震災支援報告、現地との生中継、森の健康診断結果など、2年間の活動の報告とお礼、そして夢。